取手市埋蔵文化財センター第34回企画展

会期中無休　入館無料

平将門と子孫たち

会　期　平成25年7月22日（月）から9月20日（金）

時　間　午前10時から午後4時30分（入館は4時まで）

「藤代川の合戦」錦絵：江戸時代（所蔵、写真提供：坂東市）

昭和48年に藤代町で開催された相馬野馬追（取手市教育委員会所蔵）

取手市埋蔵文化財センター　〒302－0007　取手市吉田383　TEL0297－73－2010　FAX0297－73－5003

開催にあたって

旧下総国相馬郡域には、多くの平将門にまつわる伝説が残っています。

相馬郡に多くの将門伝説が伝わるのは、平安時代の終わりに将門の子孫を称した平（千葉）常重が相馬郡の領地を伊勢神宮に寄進して相馬御厨（みくりや）が成立し、さらに常重の孫師常（もろつね：相馬氏の祖）の子孫がこの地を治めたことから、後世に結び付けられたものと考えられます。

後に将門の子孫を称する千葉氏は、祖である平良文が叔父でありながら将門の養子となったとの系譜を唱え、さらに相馬師常は将門直系の子孫の師国の養子となったと称して、将門との血のつながりを強調しました。千葉氏・相馬氏の系譜には、将門伝説が色濃く反映されていると言えます。

今回の企画展では、史実としての将門と将門の乱や、将門の子孫である千葉氏・相馬氏の動向を押さえながら、古代・中世・近世と駆け抜けた将門とその子孫たちを取り上げます。

平成25年7月

取手市埋蔵文化財センター

講演会

演題：「平将門の乱と東国社会」
講師：川尻秋生先生（早稲田大学文学学術院教授）
日時：8月10日（土）、午後1時30分から3時まで
会場：福祉交流センター多目的ホール（取手市役所敷地内）
定員：180名、当日受付順

平将門三二講座

第1回「将門の子孫、相馬氏の系譜と相馬野馬追DVD上映」
日時： 8月24日（土）、午後1時30分から3時まで
第2回「取手の将門伝説とよみがえる三仏堂ビデオ上映」
日時：9月7日（土）、午後1時30分から3時まで
2回とも講師は埋蔵文化財センター職員、会場は埋蔵文化財センター講座室、定員40名、当日受付順

展示説明

7月27・28日、8月3・4・11・17・18・25・31日、9月1・8・14・15・16日　午前11時と午後2時から
8月10・24日、9月7日　午前11時から

例　言

1. このパンフレットは、平成25年7月22日から9月20日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第34回企画展「平将門と子孫たち」にともない、発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の宮内良隆と飯島章が担当し、その他職員の協力を得ました。パンフレットの執筆にあたっては出典の注記は略し、主な参考文献の一覧をあげてあります。
3. この企画展の開催にあたり、次の方々からのご協力とご助言をいただきました（敬称略）。記して深謝の意を表します。

赤井博之、岩田泰夫、宇留野主税、海老原恒久、大槻明生、齋藤一彦、佐々木義則、鈴木龍、野口常徳、山崎英太郎
安楽寺渡辺俊晟、茨城県教育財団、栄福寺、株式会社便利堂、国王神社、桜川市教育委員会、三軒地稲荷神社、千葉市立郷土博物館、筑波大学附属図書館、坂東市教育委員会、坂東市役所、猿島郷土館ミューズ、南相馬市博物館、宮和田熊野神社、守谷市教育委員会、龍ケ崎市歴史民俗資料館、龍禅寺、崙書房出版株式会社

主な参考文献

『取手市史』古代中世史料編・通史編Ⅰ、『岩井市史別編　平将門資料集　付藤原純友史料集』、『茨城県史料古代編』
岩井市『錦絵の中の将門』、猿島郷土館ミューズ『特別展　平将門展ー千年の時を生きる将門ー』、千葉県立大利根博物館・同関宿城博物館『英雄・怨霊　平将門～史実と伝説の系譜～』、千葉市立郷土博物館『紙本着色千葉妙見大縁起絵巻』、南相馬市博物館『企画展　野馬追たんけん隊』、『企画展　将門伝説　相馬と周辺地域』
八千代町歴史民俗資料館『企画展　平将門と八千代地方ー将門の生きた時代ー』
林陸朗校註『将門記』、竹内理三校注「将門記」（『日本思想大系8古代政治社会思想』）、梶原正昭訳注『将門記』1・2、赤城宗徳『平将門』・『将門地誌』、岡田清一『中世相馬氏の基礎的研究ー東国武士団の成立と展開ー』、川尻秋生『戦争の日本史4平将門の乱』、同氏編『歴史と古典　将門記を読む』、川嶋建『下総相馬氏と守谷』・『常総戦国誌　守谷城主相馬治胤』、北山茂夫『平将門』、鈴木哲雄『動乱の東国史1平将門と東国武士団』、福田豊彦『平将門の乱』、村上春樹『平将門伝説』・『物語の舞台を歩く1将門記』

1．将門の乱とその背景

桓武天皇（737～806）の曾孫である高望王は寛平元年（889）に平姓を賜与され、上総介として、子供の国香、良兼、良将らをともない現地に赴任しました。高望が延喜2年（902）に大宰府に移っても子らはその地にとどまり、常陸大掾の源護の娘を妻にするなど、現地の有力者と婚姻して結びつきを深めました。将門の父である良将も下総国で基盤となる開墾地を開発して勢力をつくりました。

母方の地相馬郡で育った将門は15歳ころに京に出て、藤原忠平のもとで内裏の衛士を勤めていました。延長8年（930）ころに鎮守府将軍であった良将が亡くなり、将門は下総に戻りましたが、領地などを巡って伯父の国香らとの関係が悪化しました。

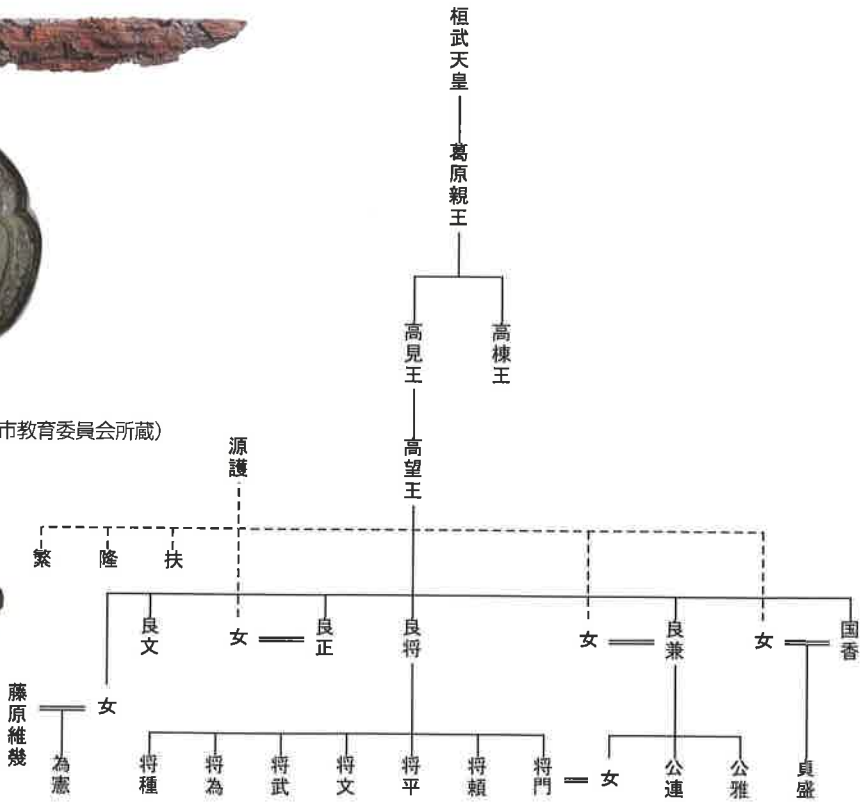
承平5年（935）、開発領主である平真樹と常陸大掾であった源護の領地争いの調停に向かう将門に、護の子ら扶、隆、繁が攻めかかりました。将門はこれを撃退しましたが、源護側であった国香も将門に討たれました。このことで、坂東平氏一族の間の反目は決定的となり、将門と良兼、良正、国香の子貞盛の争いとなりました。その後も国香の仇を名目として良兼、良正、貞盛らは将門を襲撃しますが、いずれも反撃にあって失敗します。

将門の乱（935～940）の背景となった平安時代中期10世紀のころは、征夷大将軍坂上田村麻呂などの活躍により国内が平定されるいっぽうで、律令制度によって確立された中央集権制度が身分制度や徴税制度の矛盾などにより大きく崩壊してゆく前段階でした。国司は中央から地方に派遣された官吏で、国衙を役所として行政をおこない大きな権限をもっていました。しかし、班田制の崩壊によって、地方有力者による私有田の開発がさかんになります。そのため、中央政府の権威を背景に租税徴収を強化する中央から派遣された官吏と、開拓者である開発領主との間で争いが絶えなくなりました。

天慶2年（939）11月、将門は土豪の藤原玄明を助け、常陸介藤原維幾との間を調停しようとしますが、維幾に攻撃され、反撃して常陸国府を占拠しました。当時、朝廷の有力者であった太政大臣藤原忠平は将門の立場を理解し、将門の嫌疑を晴らそうとしましたが、その思いは伝わらず、ついに将門は下野・上野国府を占領して、朝廷への反逆者となってしまいました。天慶3年2月14日、幸島（猿島）郡北山で平貞盛・藤原秀郷・藤原為憲らの連合軍と決戦がおこなわれ、兵400の将門軍が兵4000の連合軍を打ち破ったところで、流れ矢が将門をつらぬき、勝敗が決したのでした。

刀子（上）と瑞花双凰五花鏡（下）
取手市下高井向原Ⅰ遺跡出土（平安時代後期、取手市教育委員会所蔵）

文字瓦「豊田」
（坂東市然山西遺跡出土、坂東市教育委員会所蔵、
写真提供　茨城県教育財団）



桓武平氏・常陸源氏略系図　「将門記」、「尊卑分脈」などにより作成。

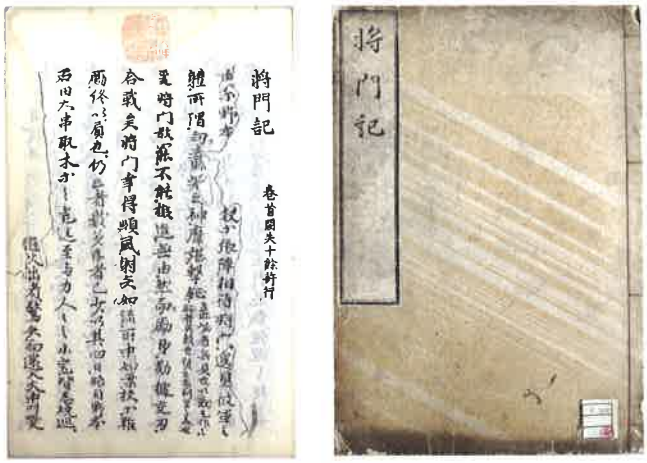
2．将門記の世界

将門が今日歴史に名をとどめているのは、承平・天慶の乱の中心人物であったからです。将門の乱とも呼ばれるこの戦乱について知る、最も基本的な史料・文献が「将門記」です。しかし「将門記」の成立年代や作者については、はっきりしたことはわかっていません。まず成立年代については、①将門の乱が平定された直後、②乱から数年から十数年後、③乱からかなりの年数がたってから、の三説があります。作者についても、①仏教の経典や漢籍が多く引用されていることから、僧侶または下級役人が東国で作成した。②朝廷の文書や記録が利用されていることから、都に住んでいたしかるべき貴族が都で作成した。③東国で作成された「原将門記」が、後に都で加筆され現在の「将門記」になった。とさまざまな説があります。

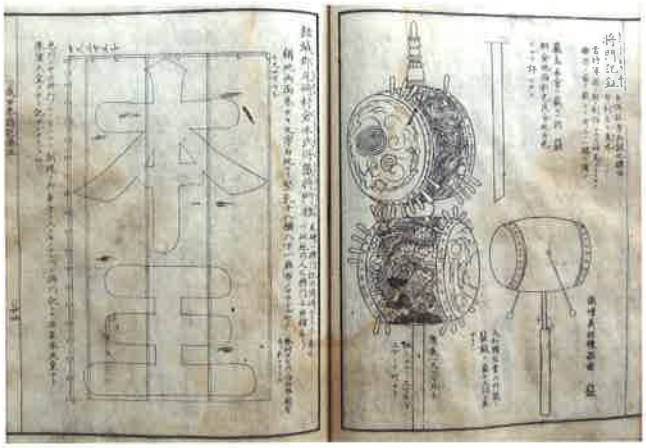
「将門記」の一番古い写本は、承徳3年（1099）に書写された名古屋市にある真福寺本です（国指定重要文化財）。また楊守敬旧蔵本「将門記」（同）は、書写年代は不明ながら、真福寺本より十数年から数十年さかのぼるとも言われています。分量は真福寺本の八分の五ほどで、草稿本の趣があります。これは明治時代に来日した清国外交官の楊守敬が入手し一度清国に渡り、後に日本に戻されたもので、数奇な運命をたどった写本と言えましょう。江戸時代になると、寛政11年（1799）に真福寺本をもとにした刊行本が出版されます。「将門記」の題名は、この刊行本から広く普及していったものです。

歴史史料としての「将門記」ですが、貴族の日記や朝廷の文書・記録などと照らし合わせると、事件の発生年月日や内容はかなり正確とされています。「将門記」の巻頭部分は欠落していますが、承平5年（935）に将門が伯父の平国香、源扶・隆・繁らと戦う場面から始まります（野本の合戦）。一族の内紛で始まった戦乱は、天慶2年（939）の将門の常陸国府襲撃以降は朝廷への反乱となり、天慶3年の将門討死で終わりを告げました。

「将門記」は乱の経緯を知る歴史史料であるとともに、「平家物語」や「太平記」へと発展する軍記物語の最初の作品とも言われます。今日私たちが将門の乱の経緯をかなり詳細に知ることができ、将門と言う武将に魅了されるのも、「将門記」が書かれ現在にまで伝わったからに他なりません。



「将門記」（寛政11年刊行本、筑波大学附属図書館所蔵）


将門記鉦（右頁）と将門旗（左頁）（「成田名所図会」、海老原恒久家文書）

平将門の乱　略年表

年　号	西暦	出　　来　　事
延長 9	931	将門は伯父平良兼の娘をめぐって良兼と不和になる。
承平 5	935	将門は伯父平国香、源護の子の扶、隆、繁らと戦う（野本の合戦）。 将門勝利。国香、扶、隆、繁は討死する。 将門は叔父平良正と戦う（川曲の合戦）。将門勝利。 源護は将門を朝廷に訴え、将門に出頭命令が下る。
承平 6	936	将門は伯父良兼、良正、従兄弟平貞盛らと戦う。将門勝利。 将門は弁明のため京に上る。
承平 7	937	将門は恩赦により許される。 将門は良兼と戦う。将門が敗れる（子飼の渡しの合戦）。 将門は良兼と戦う。将門が敗れる（堀越の渡しの合戦）。 将門は真壁郡の良兼の屋敷を焼く、良兼は筑波山に逃亡する。 将門は弓袋峠に良兼を攻めるが、勝敗はつかず。 良兼は将門の石井の営所に夜討ちをかけるが、敗退する。
天慶元	938	将門は上京する貞盛を追い、信濃で戦うが逃げられる。 将門は武蔵権守興世王、介源経基と足立郡司武蔵武芝の争いを調停しようとする。
天慶 2	939	経基は上京して、将門の謀反を朝廷に訴える。 太政大臣藤原忠平は、将門謀反の調査を命じる。 将門は無実の弁明書を忠平に送る。 藤原玄明が常陸介藤原維幾に追われ、将門の下に来る。 将門は維幾に玄明の赦免を要求し兵を常陸国府に進めるが、維幾が聞き入れないため戦い、これを破る。 将門は下野と上野の国府を襲い、国司を追放する。 将門は忠平に書状を送る。 将門は上野の国府で神託を受け、新皇を称する。
天慶 3	940	朝廷は将門の追討を命じる。 藤原秀郷、平貞盛が将門を急襲する。 2 月 14 日、将門討死にする。

「将門記」などにより作成。

3．伝説の将門

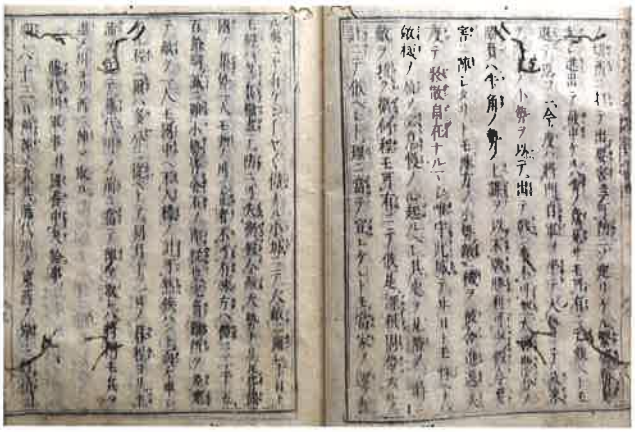
市域を含む旧下総国相馬郡には、将門にかかわる伝説が数多く残されています。しかしこれは伝説の世界であり、相馬郡と将門を確実に結びつけられる史料は、実はまったくありません。「将門記」にも、相馬郡の地名が現れるのは、「相馬郡大井の津」ただ1か所です。これは将門が新皇を称して王城を建設しようとした時、京都の大津になぞらえた場所として登場しています。やがて王城そのものが、相馬郡に作られた伝説が生まれます（相馬内裏）。そして王城の場所を、現在の守谷城にあてたりして、将門伝説が作られてきます。

市内の米ノ井には、桔梗塚があります。将門の愛妾であった桔梗御前が、将門の討死後ここまで逃れてきて、追っ手の手にかかり亡くなったと伝えられています。非業の死を遂げた桔梗御前の恨みで、桔梗を植えても花が咲かないとか、桔梗を植えてはいけないと言う伝説があります。

江戸時代の初め、天和元年（1681）頃に書かれた「前太平記」は、「太平記」以前の平安時代の源氏の武将たちがかかわった合戦物語です。「前太平記」では、将門の乱の発端ともなった将門と国香、源扶・隆・繁らが戦った野本の合戦が、藤代川（または藤白川）の合戦として描かれています。また将門が討死した合戦を、文巻川の合戦とする伝説もあります。藤代や文巻と言った、取手の地名が出てきます。

市内宮和田地区と小貝川を隔てた龍ケ崎市小通幸谷（相馬郡）の慈眼院は、平貞盛が領民の人心を安定させ、討ち死にした父国香の供養のために建立したとの伝説があります。また同市川原代（相馬郡）の安楽寺には、国香のものと伝えられる供養塔があります。同市若柴（常陸国河内郡）の星宮神社の境内には、平貞盛駒止の石があります。貞盛が星宮神社の前を馬に乗って通りかかると、馬がこの石を見て動かなくなったそうです。貞盛が石のかたわらを見ると、日頃信仰する星大明神の祠があったため、ねんごろにお参りすると馬は動いたというものです。これらは、将門伝説とはまた少し違った平氏伝説と言えるでしょう。

相馬郡に多くの将門伝説が残る背景には、相馬郡を領地として治めた千葉氏や相馬氏が、将門の子孫を称したことがあげられます。


「前太平記」の藤代川の合戦の頁（海老原恒久家文書）

慈眼院（龍ケ崎市小通幸谷）

安楽寺の平国香供養塔（龍ケ崎市川原代）

平貞盛駒止の石（龍ケ崎市若柴の星宮神社）

4．将門の子孫

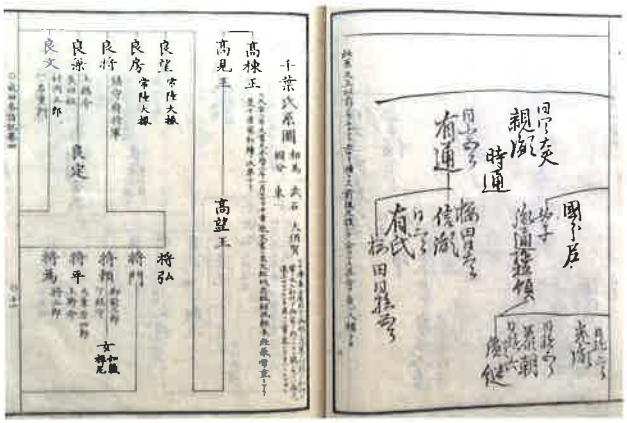
（1）　千葉氏から相馬氏へ

関東の武士の中で、将門の子孫を称したのは千葉氏です。千葉氏は、将門の叔父にあたる平良文を祖としています。「千葉妙見大縁起絵巻」（写真は裏表紙）には、良文と将門が、上野国の染谷川をはさんで国香と戦った時、童子の姿をした妙見菩薩が現れ、良文と将門を川の対岸に渡してくれたり、矢を拾ってくれたりして、勝利に導いてくれたことが描かれています。しかし、次第に傲慢になった将門の下を妙見菩薩は去って良文の下につき、以後代々の千葉氏の当主は妙見菩薩を厚く信仰したと、縁起には書かれています。

良文の孫の忠常は長元元年（1028）、安房国に侵入し乱を起こしました（平忠常の乱）。朝廷は、平貞盛の子孫の直方に平定を命じますが、果たせませんでした。長元四年、忠常は都から乱の平定に派遣された源頼信に降伏します。

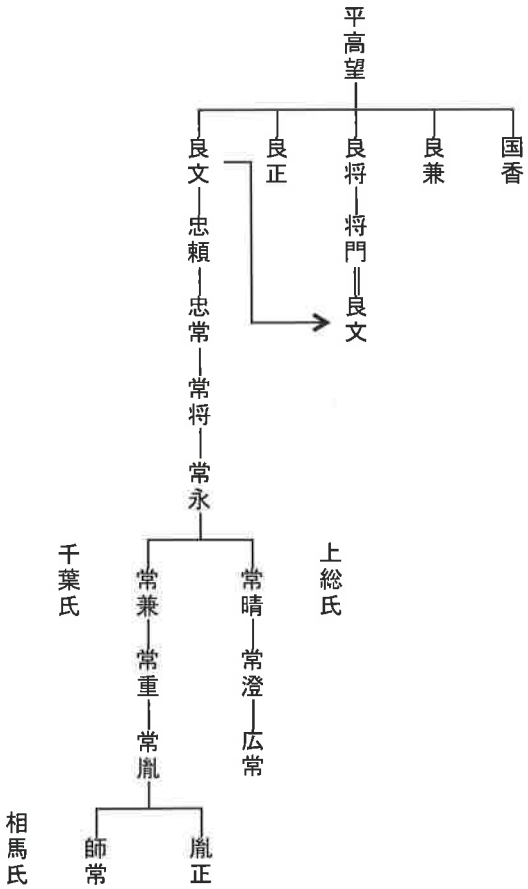
大同5年（1130）、忠常の三代後の常重（経繁とも書かれます）は、相馬郡にあった自分の領地を伊勢神宮に寄進し、相馬御厨が成立します。しかし常重や子の常胤の代の相馬御厨の支配は安定せず、一族の常澄や下総国司藤原親道、源義朝（源頼朝の父）、佐竹義宗との間で領地をめぐって紛争が生じました。治承4年（1180）、源頼朝は平家追討の兵を挙げますが、石橋山の合戦に敗れ海路安房国に入ります。安房国を平定した頼朝は下総国に進みますが、ここで千葉常胤は子の胤正・師常ら300余騎を率いて頼朝のもとに馳せ参じます。頼朝の信頼を得た常胤一族は、以後頼朝に従い、同年の富士川の合戦で平家軍を敗走させます。富士川の合戦後、上洛しようとする頼朝に対して、常胤や上総広常・三浦義澄らは東国の平定を主張し、頼朝は佐竹氏を攻撃します。頼朝の佐竹氏征伐により、常胤は相馬御厨の安定的な支配を獲得したと言えるのです。

文治5年（1189）、源頼朝は奥州藤原氏を討つために御家人たちに書状を送り、8月21日には平泉に到着することを命じます。この書状に「さうまの二郎」と記された武士こそが、師常です。師常が相馬二郎と呼ばれていることから、この時には師常は相馬御厨を治め、「相馬」の地名を家の名称として名乗っていたことがわかります。



千葉氏系図（「成田名所図会」、海老原恒久家文書）

千葉常胤の創建と伝えられる市内宮和田の熊野神社



桓武平氏・千葉氏・上総氏・相馬氏略系図
「将門記」、「尊卑分脈」などにより作成。

（2）　その後の相馬氏

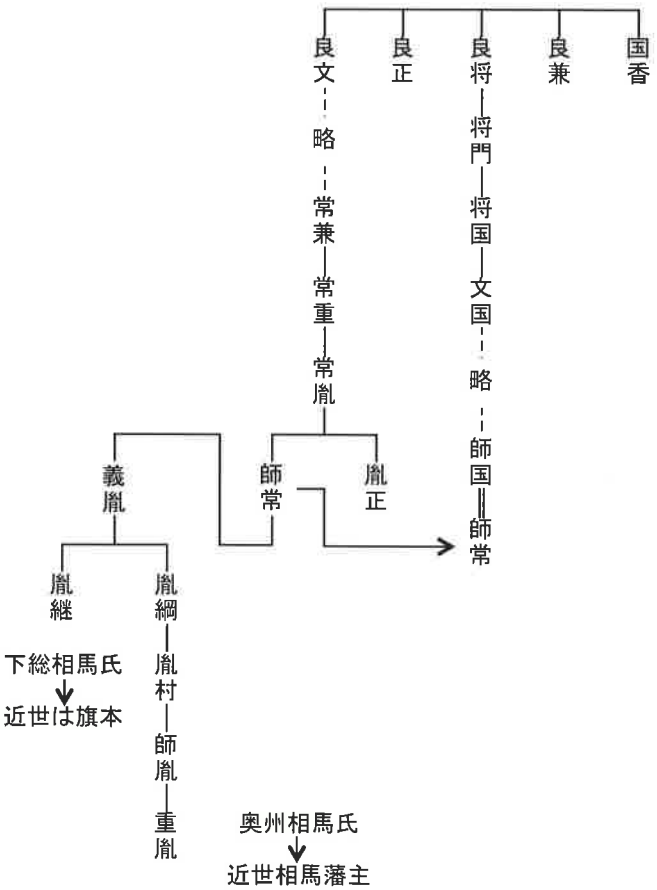
相馬領を相続した師常は、将門直系の子孫である師国の養子を称しました。将門討死の後、その子将国は落ち延びて、孫の文国の代からは常陸国信太郡に住んでいたと言うものです。千葉氏から分かれた相馬氏は、師常が将門直系の子孫師国の養子となったと唱えることで、自らの血筋をより将門に近づけようとしたのです。

師常は、東海道大将軍となった父常胤とともに頼朝の奥州侵攻に従い、常胤が恩賞として得た陸奥国行方郡の領地を相続しました。行方郡の領地は、以後相馬氏の重要な所領として引き継がれていきます。師常以降の相馬氏の系譜は、師常－義胤－胤綱－胤村－師胤－重胤と続きました。当時の武士は分割相続が一般的だったので、相馬氏もいくつかの家に分かれ、所領をめぐる一族の内紛が起きました。元亨3年（1323）、重胤は陸奥国に移住し、奥州相馬氏が成立します。以後重胤の子孫はこの地を治め、江戸時代には相馬中村藩6万石の藩主となり、廃藩置県まで続きます。毎年7月に福島県南相馬市を中心に行われる相馬野馬追（国指定重要無形民俗文化財）は、将門が行なった軍事訓練を、重胤が伝えたものとされています。

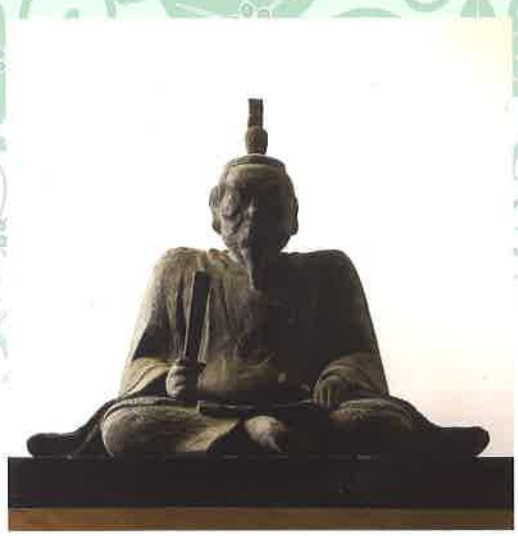
師常の子孫は相馬領を引き継ぎ、代々相馬氏を名乗りました。ゆたかな農村地帯であった相馬の領地で商業・流通が活発になると、守谷の地は街道が交差し、また小貝川の水路の船着場もあって、市場などで栄え地方都市の町並みを形成していたと思われます。現在みられる守谷城は、こうした城下町のある台地の北の突端に築かれた戦国時代の平山城で、相馬氏の独立領主としての最後の城となり、街道によって結ばれた高井城も集落から発展した平山城で、相馬氏一族の拠点のひとつでした。
永禄9年（1566）それまで高井城主であった治胤が第15代相馬家当主になります。戦国時代にあって、常陸と下総の国境にあった守谷城は後北条方の最前線となりました。天正18年（1590）、治胤と弟の胤永は小田原城で後北条方として戦いました。小田原城落城後、治胤は相馬郡に帰ることなく、江戸で没しますが、相馬家は旗本として秀胤が5000石を領します。守谷市海禅寺には相馬家のあとを継いだ盛胤以後祚胤(嘉永4年）までの位牌が安置されています。胤永の子孫は別に、代々小田原藩大久保家の家臣として明治維新を迎えました。寛永17年（1640）83歳で亡くなった胤永の墓は高井城近くの高源寺の境内にあります。

平親王将門城址図
（「利根川図志」、崙書房複製本、取手市教育委員会所蔵）

相馬野馬追大祭絵はがき
（原ノ町二於ケル騎馬武者行列、個人蔵）

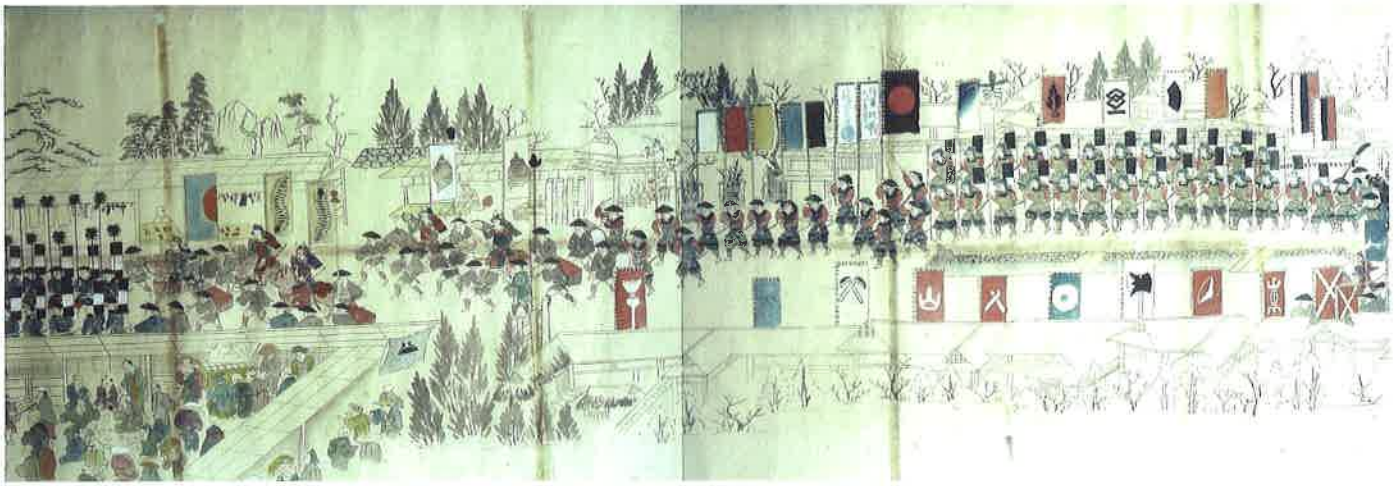


相馬氏略系図『取手市史古代中世史料編』所収の諸系図により作成。



平将門像
（国王神社所蔵、県指定文化財、写真提供　坂東市役所）
写真パネルで展示します。

千葉妙見大縁起絵巻
（栄福寺所蔵、千葉県指定文化財、原本は非公開、写真提供　千葉市立郷土博物館）
良文と将門の前に、妙見菩薩が現れた場面です。
千葉市立郷土博物館が所蔵する複製を展示します。



相馬之馬追祭図絵巻（所蔵、写真提供　坂東市役所）

前太平記文巻川の合戦（所蔵、写真提供　坂東市役所）

埋蔵文化財センター第34回企画展
「平将門と子孫たち」
平成25年7月22日～9月20日
編集／発行　取手市埋蔵文化財センター　制作／印刷　（有）石山宣伝研究所